

母に感謝

中2の頃の私は、何だかわからないが、イライラした。特に親から話しかけられた時は、一層だった。何も考えず落ち着く時は、部活をしているか、夕飯までの間のゲームをする時間だった。

ある日、早く帰宅すると、リビングで弟がゲームをしていた。当然のようにゲームを取り上げると、すぐにケンカになった。すぐさまキッチンから母が出てきて、私を叱った。

私は、これまた当然のように母に反抗した。そして、今まで言ったことのない暴言を吐いた。(あまりにも酷い暴言のため、内容は文脈から想像してください)

すると母は自室へ戻り、仕事を始めた。5分後くらいだったであろうか、ゲームをしている私のところに戻った母は、紙で作った輪の前面に、三角形に切り取った紙を貼り付け、それを頭にかぶっていた。幽霊…私は、すぐさま「ふざけるなよ!」と言ったが、母からの返事は、「私は死んだと思ってください。あなたが望むようにするから。」というものだった。

それからは、母親に何を話しかけても相手にされなかった。当時の私にとっては、家族団らんとも言えない食事の時間、私の分はテーブルには用意されていなかった。ただありがたいことに、冷蔵庫には皆と同じものが入っていて、自分で温めて食べた。とはいえ、結構辛かった。だから、何度も母に謝罪した。けれど、あまりの暴言だったため、受け入れてはもらえなかった。

2カ月程経った5時間目の数学の授業中、職員室から学年の先生が私を呼びに来た。家族が迎えに来るから早退するよというものだった。すぐに支度を終え、迎えに来た車に乗り込むと、癌で入院している祖母の容態が悪く、危篤ということを知った。助手席の母は「会えるかな」と繰り返し言いながら泣いていた。

病院についた時、祖母は息をしていなかった。母は祖母の横で人目をはばからず泣いていた。私は祖母が大好きだった。ただ、母との関係もあり、どんな態度でいればいいのか、また、母に何と声を掛ければいいのか分からず黙っていた。今はこれまでの謝罪をするタイミングではないとはわかっていた。

翌日、葬儀の準備のため、親族が打ち合わせをしていた。そんな中、父に誘われドーナツのチェーン店に行った。そこで父からは、今本気で謝罪しないといけないのではないかと、言われた。いい加減懲りていた私は、打ち合わせの会場に戻ると、母が一人になるタイミングをみて、心から(と思われる)謝罪をした。

母は許してくれた。「私がたった一人の母を失った悲しみがわかるか」「あなたが言ったことは、こんな状況を望むことだったのか」「二度と言うな」と言われたのを覚えている。母の真剣に話す姿は今も覚えている。もちろん、それ以降あんな暴言は吐いていない。芯を通し接した母、2か月間も幽霊を演じた母に感謝している。今は、孫の顔を見せることで、勝手に孝行していると思い込んでいる。

このような話を前置きに、「反抗期に負けるな!お母さん頑張っ!」と保護者会で何度か話してきた。また、日々流転し成長する子供たちに、家族よりも長い時間接し、支援したり時には伴走したりできる教職は、とても魅力的な職だということも伝えている。そして、このようなことを書くと、数年前を思い出す。

ああ…また担任やりたいなあ。ここが唯一のひとりごと。

(M・S)